

鶴山書院報

第11号

公益財団法人
孔子の里

〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原碑舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.nc.jp
URL http://www.ko-sinosato.com

発行人
理事長 横尾 俊彦

聖廟美装と再興

〜未来に伝える立志の原点〜



公益財団法人孔子の里

理事長

横尾

俊彦

(多久市長)

多久聖廟は1708年に創建され、314年が経過しています。実に3世紀を超える風雪と時空を越えて建立の地に佇んでいます。市長就任のころから気になり、できればぜひ整えたいと願っていたのが多久聖廟の美装です。

市長就任時からの素朴な願い

市長並びに理事長就任直後の秋季秋葉から、春秋に行われる秋葉の前の日曜日朝に有志とともに聖廟とその周囲の清掃を行っています。箒を手には、廟の扉前から掃きはじめ、裏手にも回って行います。年々歳々そうじをして改めて気づかされるのが廟の色彩の劣化です。歴史を経た風格を見る感慨もあるもの、すこしなりとも綺麗に整えて、未来の世代になぎたいとも思うのです。

そのそうじの際に廟の柱や壁などの実相を撮影しました。そして3年前に、改めて文部科学省文化庁を訪ね、文化財保存担当部署の担当専門官にもお目にかかり、その画像を示し、よりよく保存し、将来に継承するために美装を整え直し、創建当時の威風堂々たる雄姿を再現したいと相談しました。そして助言も頂きました。

その結果、美装の前に、まずは耐震調査を行い、必要な耐震補強工事を施し、その上で、要望した美装整えをすることが好ましいとの内容のアドバイスを受けました。

そのためには、予算の確保、技術的指導助言を文化庁から受けつつ、慎重かつ丁寧に行うことが欠かせません。できれば急ぎ整備したいのですが、スケジューリング的にも数年間をかけて実施することになることも理解できました。

そこから文化庁に改めて事業実施と予算確保の要望を行い、実行に入りました。

そのような経過を踏まえ、まさに多久聖廟の美観修復作業が現在実施中なのです。

耐震調査は、廟の建つ地盤、建物の基礎、建物本体などで慎重に実施され、その結果は良好です。建築構造体としての聖廟の強度も分析され、まずまずの評価もいただきました。

弱いと分析された部分は補強して強靱化を図り、まさに後世に遺しつなぐ手あてを進めます。創建当初と言えば、孔子像等の修復を行ったときには、孔子像本体の装束の表面や袖の返し部分などに細かな吉祥文様があり、金箔を施したであろう痕跡も見えたことも思い出します。黄金に輝く孔子像が、多久茂文公はもとより、おそらく多くの領民の心をひきつけたはずだと実感しました。

未来世代に継承したい聖廟の雄姿

今回の廟の美装修復が整えば、創建に込められた茂文公の深い思い、熱意や立志の一端をさらに理解できるはずと期待も膨らみます。

昨年十一月に他界された孔徳懋先生は、多久を訪問された際に、「かくも中国から離れた日本の、この多久の地で、かくも恭しく厳かに先祖を祀り、大切に思っていたにしていることに深く感激し、感謝に堪えません」と感動を隠さず述べられました。それはまさに多久茂文公と建立に携わった多久の先人への感謝でもあったと思えました。領内随所から木材を集め、人々の力と匠の技をもとに、立派に建立された孔子廟です。祈りを込めて京都の儒学者・中村惕齋に依頼し鑄造された孔子像が到着し、廟に納め、それから多久聖廟と秋葉は今日まで連綿とつながっています。そこに注がれた熱い思いを未来に伝えるためにも、この聖廟美装をしっかりと発願成就したいと念じています。

第24回 全国ふるさと漢詩コンテスト

令和3年11月27日、多久市
東原摩舎講堂において、第24
回全国ふるさと漢詩コンテス
ト表彰式及び記念講演会を開
催しました。

全国ふるさと漢詩コンテス
トは、儒学と文化の里づくり
を目的に、江戸時代の郷校東
原摩舎で学ばれていた国学や
漢詩に親しんでいただくことと
平成10年に始まったコンテス
ト。今回で24回目を迎え、国
内の漢詩大会等の中でも指折
りのコンテストと言われるよ
うになりました。

今回は、「橋(橋梁)」をテー
マに募集。北海道から沖縄ま
で全国各地からの応募があり、
台湾、オーストラリアと国外
からの応募もありました。応
募者総数は165名、応募作
品数は237点でした。

最優秀賞 嵐山暮景

埼玉県草加市 平塚 純造

嵐山暮景
平塚純造

河水青山鎖暮烟
古都風色愈幽玄
巡遊孤客倚藜杖
渡月橋頭玉鏡懸

河水 青山 暮烟に鎖さる
古都 風色 愈 幽玄
巡遊の孤客 藜杖に倚らば
渡月橋頭 玉鏡 懸かる

【講評】古都の夕暮の景に孤客の情がよく表れている。

塚純造さんの『嵐山暮景』が
選ばれました。

同日、最優秀賞の作品を陶
板に刻んだ石碑を多久聖廟展
示館前に建立し、除幕式を行
いました。

表彰式に併せ、公開講演会
を開催しました。宇野茂彦先
生(中央大学名誉教授、公益
財団法人斯文会理事長)を講
師に招き、「もう一つの孔子
の主張」論語における直
(正直)の徳について考える
」と題し、ご講演いただきました。

優秀賞 山郭櫻花

山梨県都留市 高山 一雄

山郭櫻花
高山一雄

環郭連峰戴雪明
騷人十里傍溪行
櫻雲橋上微風起
紅雨紛紛高遠城

郭を環る連峰雪を戴いて明らかなり
騷人十里溪に傍うて行く
桜雲橋上微風起る
紅雨紛紛高遠城

【講評】固有名詞を上手に詠いこんでおり風格も上乘。

優秀賞 放生橋

沖縄県那覇市 長嶺 勝磨

放生橋
長嶺勝磨

圓覺寺門招俗人
放生池面好風頻
偶來橋上蓮花淨
知得清香依舊春

圓覺寺門 俗人を招く
放生池面好風頻りなり
偶たま橋上に来たれば蓮花淨く
知り得たり清香旧に依る春

【講評】花の香りが溶けこんで味わい深い。



令和 3 年度 「儒学と文化の里づくり」
全国ふるさと漢詩コンテスト



▲講演された宇野茂彦先生



▲(右から)横尾俊彦市長、平塚純造様(最優秀賞受賞者)、宇野茂彦先生、石田俊二教育長

入選 聖橋を過ぐ 東京都渋谷区 岡田 讓

過聖橋

岡田 讓

聖堂垣屋自參差 聖堂の垣屋 自ら參差

遙憶當年侍絳帷 遙かに憶ふ當年絳帷に侍せしを

楷樹茗溪渾似舊 楷樹茗溪渾て舊の似く

依依難去過橋時 依依として去り難し橋を過ぐる時

【講評】聖堂の雰囲気がよく醸し出されている。

入選 橋上偶成 東京都国立市 浦上 佳奈

橋上偶成

浦上佳奈

桃紅池碧小園春 桃紅く池碧し小園の春

橋上倚筇懷舊頻 橋上筇に倚り懷旧頻りなり

臨水插花如昨日 水に臨み花を挿すは昨日の如きも

翠鬟女作白頭人 翠鬟の女は白頭の人と作れり

【講評】懐古の情が滲み出ている。

入選 夏の日の山の村 兵庫県姫路市 前田 隆弘

夏日山村

前田隆弘

雷雨溪風暑熱收 雷雨溪風暑熱收まる

黄昏閑歩板橋頭 黄昏閑歩す板橋の頭

水亭幸有新醕酒 水亭幸いに有り新醕の酒

夏日田翁更何求 夏日田翁更に何をか求めん

【講評】悠々閑々、更に何をか求めん。

奨励賞 墨田川舟遊 佐賀県吉野ヶ里町 吉田 雅孝

墨田川舟遊

吉田雅孝

金龍山畔玉樓東 金龍山畔玉樓の東

春酒載舟舟若風 春酒舟に載せて舟風の若し

兩國清洲還勝鬨 兩國清洲還た勝鬨

畫橋十六醉鄉中 画橋十六醉郷の中

【講評】固有名詞がうまく詩に溶けこんで、良い味わいを出している。

石井鶴山の「北海観風草」の旅(其の二)

— 駒返し・親不知を詠む —

熊本大学 教授 中尾健一郎

石井鶴山(一七四四—一七九〇)は、天明六年(一七八六)春、日本海沿いの諸国を旅して帰国した。

まず信濃国(長野県)の浅間山噴火の被災地を訪れたことは、本誌前号に記したとおりである。

その後、中山道の信州追分宿から北国街道に道を転じ、越後国(新潟県)に至る。そしてここでも味わい深い作品をいくつか残した。今回はその中の二首を紹介しよう。

越後国糸魚川藩の儒者松山子楨と会い、消夏楼にて歓待を受けた後、糸魚川城から西に向かい、「駒返し」と称する海辺の難所を通る。そこで次の七言絶句を詠んだ。

回駒

右畔玄溟左畔山

行人多在畏途間

風濤時促歩兵恨

泣擁鳴騶空自還

右畔は玄溟 左畔は山

行人多く畏途の間に在り

風濤時に促す 歩兵の恨み

泣きて鳴騶を擁ぎ 空自し

(『石井鶴山先生遺稿』作品番号612)

右側は暗い海で、左側は険しい山。旅人はその間の危険な道を通らなければならない。吹きつける風と押し寄せる波は、阮歩兵の恨みを募らせんばかり

である。嘶く馬に涙の別れをつけ、むなしくも来た道を引き返させる。

転駒の「歩兵」とは、中国の竹林の七賢の一人である阮籍(二一〇〜二六三)のことである。「歩兵校尉」という官職に就いたことからいう。その阮籍が、策略と陰謀の渦巻く当時の政局に閉塞感を覚え、現実から逃れるかのように、ある時あてもなく馬車を駆つたところ、行き止まりに突きあたってしまったので、慟哭して引き返したという(『晋書』阮籍伝)。

この故事から生まれた言葉が「窮途の哭」である。苦境や困窮に立たされて悲しむこと、または自分の志をのばせず悲しむことをいう。鶴山の詩はこの故事をふまえて、「駒返し」がいかに難所であるかを表現すると同時に、作品全体に一種の悲壮感を漂わせている。

この難所は北陸道の青海宿(現在の糸魚川市青海町青海)と歌宿(同市青海町歌)の間にあり、鶴山と同時代の橋南谿(一七五三—一八〇六)は、この場所を次のように記している。

此所は波風無き時といへども、常に山の根へ波

打かけ通路なりがたきゆゑに、絶壁の半山に岩

を穿ちて、細き道を付旅人通行す。其間纒の所

なれども、馬上なりがたき故に駒返りと名付く。

馬は両方の駅より牽来り。荷物は其纒の所を人夫にて送り越すとなり。(『東遊記』一巻四「親不知」)

馬は通れず、人間しか通れないほど狭い道であったことがわかる。ゆえに、そこまで乗ってきた馬は返すしかなく、それが地名の由来となったのである。さて、駒返しを通過して海沿いの道を西に進むと、次の難所の「親不知・子不知」(以下「親不知」)が待ちかまえていた。歌宿と市振宿(現在の糸魚川市市振)の間に位置する。地名の由来については後述するが、森鷗外の小説「山椒大夫」にも登場するので、知っている読者も多いのではないだろうか。鶴山がこの場所で詠んだ詩を見よう。

親不顧

親をも顧みず

一路、潮は石崖を噛む。行人、退潮を問ひ、

趨りて過ぎ、潮進めば則ち竄れ、身を空に匿

して、以て退潮を待つ。倉皇として父子と雖

も相い顧みる能わず。故に名づく(原漢文)

大海潮随呼吸鳴

穿巖狼狽学蛇行

咽吭一路無他徑

大海潮は呼吸に随いて鳴り

巖を穿ち狼狽し蛇行を学ぶ

咽吭のごとき一路 他径

無し

難避当年勝母名

避け難し 当年 勝母の名

(『石井鶴山先生遺稿』作品番号613)

まず題詞の大意を述べよう。石の断崖に、荒波が

押し寄せる。通行する人は波が引くのを待つて、断崖に沿って走り、波が押し寄せると断崖の隙間に身をひそめ、再び波が引くのを待つ。これをくり返しながら、慌ただしく道を行くので、親も子も互いを顧みることができない。ゆえに「親不顧」という名がついた。

続いて、詩の内容を見よう。まるで海が呼吸をしているかのように、大波は寄せては返し、返してはまた寄せながら、大きな波音を轟かせる。通行人は断崖の隙間から隙間へと狼狽ながら走り、その様子はあたかも蛇がくねくねと進むかのようなものである。

要害の地であるこの場所を通る道は他に無い。昔の「勝母閭」に類する今の「親不顧」は親不孝な地名であるが、避けて通ることはできないのだ。

転句の「咽吭」は、「咽」も「吭」も原義は「のど」であり、転じて狭くて地勢が険しい場所、つまり要害の地を指す。起句の「呼吸」に対応させた表現か。結句の「勝母」は曾子の故事をふまえる。親孝行の曾子は、「勝母（母に勝つ）」という名の村を避けて通ったという。『淮南子』説山訓に見える。鶴山はこの故事をふまえ、できるものなら「親不知」という名のこの場所を避けて通りたいが、ほかに道がないので避けられないという気持ちを表したのだ。

ここで「親不顧」という題が気になる。どうして「親不知」ではなく、「親不顧」であろうか。この疑問を解く際に参考になるのが、『奥の細道』の注釈書『奥細道菅菰抄』（以下『菅菰抄』）である。該当箇所を次に掲げよう。

親しらず・子しらずは、越後の国、歌といふ宿より一振までの間の往還にて、山の下と云。一方は嶮山にて、其下の波打ぎはを往来す。故に、浪の来る時は、岩の陰にかくれ、引ときは出て走る。されば波のひく間、わづかのうちを走るゆへに、親をもちへり見ず、子をも思はず、と云心にて、此名あり。犬もどりは、中屋敷と云所より、長浜の宿迄の間に有て、岩石の間をわたる。駒がへしは、遠海と歌との間、いづれも越中への往還海辺なり。（傍点は筆者による）

傍点部の「親をもちへり見ず」は、鶴山詩の「親不顧」と同じである。『奥細道菅菰抄』の著者篁笠庵梨一（一七一四—一七八三）は、俳諧中興期の芭蕉研究家であり、芭蕉の足跡をたどって実地調査を経て、この注釈書を完成させたという。同書の刊行は安永七年（一七七八）、鶴山の旅に先立つこと八年である。右の引用箇所と鶴山詩の題詞を並べて見ると、鶴山が『菅菰抄』を読んだことはほぼ間違いない。つまり鶴山はこの一帯を旅するに先立ち、梨一の『菅菰抄』や芭蕉の『奥の細道』をしっかりと読んでいたと考えられる。

では、そもそも梨一が注釈をつけた芭蕉の『奥の細道』は、この場所をどのように描いたのであろうか。該当箇所を掲げよう。

けふは、親しらず、子しらず、犬もどり、駒返しなど云、北国一の難所を越て、つかれ侍れば、

枕引よせて寝たるに、一間隔て、面の方に、若きをんなの声、二人計ときこゆ。

さすがに芭蕉は「北国一の難所」を通って疲れはて、道の辺に一句を詠む元気も無かったようだ。代わりに「一家に遊女も寝たり萩と月」と、その夜の宿場のことを詠んだところに、俳諧師としての本領が発揮されている。そもそも遊女のことはフィクションであるという説もあるが、それはともかく、芭蕉と鶴山、ほぼ百年を隔てて同じ場所を通った俳諧師と漢詩人の二人が、この場所に対して示した関心と興味はかくも異なっていて面白い。

本誌前号において、鶴山の旅立ちを天明七年（一七八七）としましたが、正しくは天明六年です。申し訳ございません。ここに訂正いたします。

【注】

- 1 『日本紀行文集成』第二巻（日本図書センター、一九七九年）所収。ただし旧字体は通行の字体に改めた。
- 2 萩原恭男校注『芭蕉おくのほそ道 付曾良旅日記 奥細道菅菰抄』（岩波文庫、一九七九年）による。
- 3 上野洋三・櫻田武次郎校注『芭蕉自筆 奥の細道』（岩波文庫、二〇一七年）による。ただし通読の便を考えて一部濁点を補った。

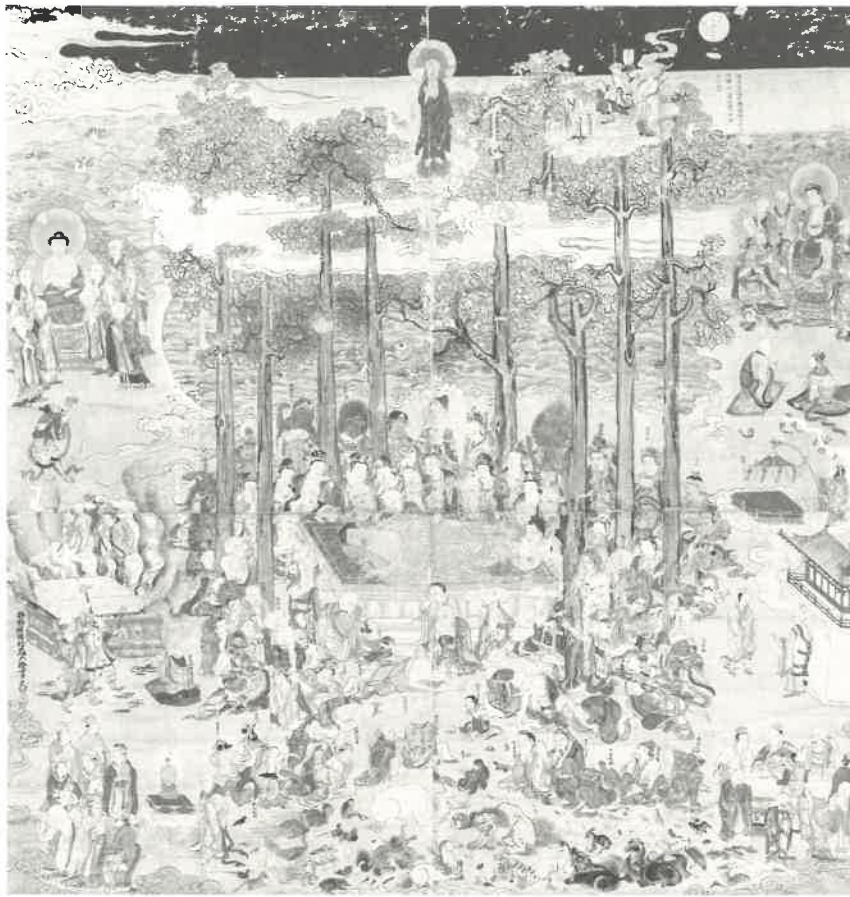
新発見、桐野山妙覚寺の仏涅槃図

佐賀県立博物館

福井 尚寿

仏涅槃図（涅槃図）は、釈尊入滅日とされる二月十五日に仏教寺院で行われる法会、涅槃会の本尊像として掛けられる。

本稿で紹介する南多久桐野の古刹、天台宗の桐野山妙覚寺所蔵の仏涅槃図（以下、妙覚寺本と記す）は、令和元年に所在が確認され、令和二年修復、令



和三年四月十二日付で多久市重要文化財（絵画）に指定された。短期間に指定文化財となったのは、妙覚寺本が多久邑の絵師狩野信周を作者とする狩野派の堅実な描法による大作であり、仏涅槃図のなかでも釈迦入滅に加えてその前後の出来事を周囲に描く点と、集まった仏教諸尊等の名が墨書される点と、色とし、箱蓋裏銘から享保六年（一七二一）に龍五郎こと

後の七代多久邑主茂堯を寄進者、妙覚寺十代住持快弁を願主とした制作が知られ、江戸中期に多久邑で制作された絵画として重要性が認められたからだろう。

概要

― 涅槃前後の出来事を描く

妙覚寺本は紙本着色、本紙は八枚を継ぎ合わせた縦二二五センチメートル、横二一七センチメートルの大幅面で、掛幅装に仕立てられている。

主題は、北枕の寝台の上で目を閉じ、右手を前に横たわる釈迦と、その周りに菩薩、明王、天部といった諸尊から、

十大弟子、羅漢及び鬼神、靈獣、動物までもが嘆き悲しむ情景である。画面右側上端の満月の下に墨書があり「東天竺俱尸那国鳩尸那城／跋提河辺沙羅双樹／入涅槃」と、インドのクシナガラのパツダイガ近くのサラソウジュの場所で釈迦が涅槃に入ったと記されている。

妙覚寺本は、釈迦を含め諸尊等百四十と動物等六十六が描かれ、その内、墨書で名が付されるのは諸尊等八十八である。たとえば釈迦の両足に触れる女性の背に「老婆」と記され、釈迦の寝台の奥には手前から釈迦弟子（迦留陀夷、薄俱羅、迦旃延など）、菩薩（勢至菩薩、普賢菩薩、文殊菩薩、虚空藏菩薩など）、天部（毘沙門天、広目天）、八部衆（乾闥婆、緊那羅、阿修羅）の名が順に記されている。図像等に相応した墨書であるが、仏涅槃図で諸尊等個々の名が明らかなものは少なく、後述する妙覚寺本と同系統の仏涅槃図で名を記したものはこれまで確認されておらず、妙覚寺本は諸尊等比定の貴重な例といえる。ただし、妙覚寺本は最上部中央の立像に「弥勒仏」と記され、釈迦滅後の五十六億七千万年後、この世に現れる弥勒菩薩とするが、描かれているのは如来形であり解釈が異なる。これらの墨書がいつ、だれによって付されたか不明であるが、拝観者の理解を考慮したものといえよう。

妙覚寺本は、さらに釈迦入滅前後の出来事が周囲に描かれ、つまり図上部中央の立像は（釈迦が虚空に昇り大衆に入滅を予告する場面）、向かって右側の上から（釈迦が摩耶夫人に説法する場面）、（釈迦の棺がクシナガラ城をめぐる場面）、（力士が釈迦の



棺を挙げようとして動かない場面)、左側の上から〈クシナガラ城の「工巧の子」、純陀の供養を受ける場面〉、〈釈迦の入滅に遅れ悲しむ迦葉のために釈迦が棺より両足を出す場面〉、〈釈迦の舍利を八国の王に分ける場面〉の七場面で、中央の涅槃を入れて八場面となり八相涅槃図(あるいは涅槃変相図)の名称でも呼ばれる。同系統の作例は、高麗時代末期(十四世紀後半頃)作とされる佐世保市最教寺蔵の重要文化財《八相涅槃図》を典型とし、ほかに県内で佐賀市善定寺蔵の福田橋左衛門(清信)筆で明暦四年(一六五八)作と、鹿島市普明寺蔵の永松玄徳(長則)筆で元禄五年(一六九二)作との二作例が知られ、いずれも狩野派の描法による。ただし、釈迦は右手枕で横たわるなど妙覚寺本とは異なる部分が散見され、直接の影響関係は指摘しがたい。

作者は狩野信周

画面左下方に作者の落款、署名「狩野信周行歳六拾書之」及び「□頼」朱文壺形印、印文不明印、署名の上に割印の計三印が押される。狩野信周については、深江順房撰『丹邱邑誌』(文研出版、平成五年)の狩野文周の項から、文周の三男で文周の後を継いだことが知られる程度で、作例も北方町永林寺所蔵で延宝九年(一六八一)二十歳作の仏涅槃図が確認されているにすぎない。

父の文周は、龍造寺家の家臣にして絵師で、はじめ勤修寺姓であったという。江戸時代多久家の基礎

を築いた龍造寺長信の母慶闇ゆかりの慶闇寺の弟子(僧)で、長信かその嫡男で初代多久家主安順の命で還俗、江戸狩野家に学び、狩野家の姓と紋を免許、狩野姓を名乗る。作例は未確認で、門人に御厨夏園がいる。文周の継嗣信周も多久家の家臣にして絵師を兼ねていたと考えられる。妙覚寺本の制作は公的な業務だったのだろう。

制作背景

箱蓋裏には墨書銘四種があり、①「大涅槃像一幅 小城郡多久桐野山什物表具御寄進大檀主龍五郎様享保六辛丑天八月吉祥日願主大僧都法印快弁」と大きく中央に書かれ、左右に②「天保十二辛丑八月吉祥日十五世法印弁勝載表具」、③「大正九年庚申四月吉祥日楠山田盛代再三表装」、④「昭和四年三月吉辰現住法印諸隈慶延代再四表装」の順に記され、①は寄進銘、②から④はその後の表装替えの記録である。

妙覚寺本を寄進した「龍五郎」は、後の七代邑主多久茂堯(一一七一〜六九)であり、六代邑主茂明の長男にして、元文五年(一七四〇)二十五歳で邑主となる。その前の元文三年(一七三八)佐賀藩当役(請役家老)となり、寛延三年(一七五〇)諫早一揆を鎮圧、死刑二十六人を救え、翌年、死刑者の供養石塔を桐野山中に建てている。享保六年(一七二一)の妙覚寺本の寄進は、龍五郎と称した世子時代のことで当時六歳にすぎない。

妙覚寺は天平年間(七二九〜七四八)創建で、開基は聖武天皇、開山は行基と伝えられる。何度か火災に見舞われた後、長信と安順の父子によって復興、以降多久家の「祈禳道場」として信仰された(大潮

元皓「桐野山妙覚寺記」、『丹邱邑誌』収録)。

快弁(一六六五〜一七五四)については、大潮元皓「大僧都法印快弁伝」(『丹邱邑誌』収録)に詳しく、神崎郡石動村(現吉野ヶ里町)の大坪氏の子で、延宝六年(一六七八)十四歳で元忠寺(現佐賀市、廃寺)の秀快のもとで出家、快弁と命名。秀快の命で江戸等で修業後、元禄八年(一六九五)、肥前に帰り元忠寺を継ぐ。その間、三代佐賀藩主鍋島綱茂の信任を得て、江戸藩邸の護摩道場をつかさどる。宝永三年(一七〇六)綱茂死去後、正徳二年(一七一二)五代邑主茂村から妙覚寺住職に推挙。享保元年(一七一六)五十二歳、六代茂明の子茂堯誕生の際、佐賀城中多久屋敷において三昼夜、護摩法を修す。享保七年(一七二二)から妙覚寺の建物の修造にとめ自ら「土木の労」にあたり、新に茶堂・客堂及び仁王門、宝篋印塔内の阿弥陀像から大般若尊経満六百卷、その他の仏像・設備・経巻まで、「凡そ院宇の宜しく有るべき所のものは、悉く具わる」と伝える。享保二十年(一七三五)七十一歳で隠居、八十歳を過ぎても「鬢鏢として強健、耳目聡明」だったという。

享保六年の妙覚寺本寄進は、快弁による建物修造等の妙覚寺充実事業の先駆けといえるが、六歳の龍五郎を寄進者とした具体的な理由は不明である。諸尊等名の墨書については、茂堯誕生の際の快弁による護摩修法から推して、快弁が妙覚寺本の理解を助けるために記したのかもしれない。

※服部政昭氏から写真提供をはじめ種々御教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

多久家文書

『水江事略』(翻刻文)紹介 9

公益財団法人孔子の里理事 服部政昭

水江事略卷之五

長信公譜之四

天正五年丁丑ヨリ
天正十一年癸未ニ至ル

五月隆公大村御追伐トシテ貝瀬ニ陣セラル我公
下総守康房ヲ御陣代トシテ軍ヲ出サル數日ノ合
戰當家ノ軍勝利有大村理專(丹後守純忠)和ヲ
乞隆公人質ヲ取テ囲ヲ解カル人質ヲ鹿子瑞雲菴
ニ置レ我家臣是ヲ警衛ス

七月後藤貴明志久村ヲ我公ニ贈ル是ハ佐嘉武雄
ノ和睦我公ノ御扱ニヨリテ調ヒシ故貴明ヨリ其
謝儀ニ贈ル所ナリ

志久村ハ元來貴明ノ所領ナリ我公多久御在城
ノ初ヨリ數年争ヒ奪ノ地ナリ村人モ或ハ公ニ
歸シ或ハ貴明ニ從フ以來我公ノ領地ト成村民
皆多久ニ屬ス

同月隆公軍ヲ遣ハシテ伊萬里ヲ征セラル伊萬里
兵部太輔家俊(一ニ治)没落ス
同十八日隆公モ御出馬有我公士卒數百人ヲ出シ
テ伊萬里濱ノ城ヲ守ル此時龍造寺ノ一族武雄黒
髮ノ番タリ

十二月二十四日隆公ノ使札多久ニ到ル其文ニ云
到松浦後藤平戸壹州草野衆一兩日中取懸るの

由告來也加勢無餘表之奈於石井伊賀守西岡慶
賀等以早可及其行云々

我公御承知有テ軍ヲ松浦ニ出サル

今年藤津郡七浦ノ住人多良伊豫ト云者隆公ノ命
ニ背テ長尾村ニ來リ倉富氏ヲ頼ミ我公ノ臣タラ
ン事ヲ請フ公是ヲ隆公ニ告ク隆公是ヲ許シ玉ハ
ス御憤リ猶止マス是ニ依テ公原千右衛門福地源
右衛門ヲシテ是ヲ誅セシム二人井手山ノ原ニ到
テ此事ヲ議ス服部權次兵衛(時二十七歲)衆ニ
先立テ長尾ニ到リ窓ノ戸ヲ打破リ飛入テ伊豫ト
闘ヒ互ニ疵ヲ被ル時二原福地馳來リ千右衛門ハ
伊豫ヲ討取り源右衛門ハ其妻子從類ヲ切殺ス

同年我公米倉六郎太郎種次ノ娘ヲ養ヒ龍造寺又
八郎久重(下総守泰房ノ子)ニ嫁セラル
種次ノ娘ハ芳岩夫人ノ姪其母ハ華盛ト号シ小
田政光ノ息女ナリ

又鴨打左馬太輔胤泰カ娘ヲ養フテ蒲池掃部助鎮
行ニ妻ス(鎮行ハ筑後山下ノ城主鑑廣ノ子ナリ)

天正六年戊寅 長信公御年四十一

十一月十二日向國高城耳川ニ於テ大友嶋津合
戰有大友宗麟カ軍大二破レ宗徒ノ輩及ヒ士卒ノ
討死スルモノ四千餘人ナリ大將宗麟ハ手勢僅ニ
討成サレ豊州ニ歸ル爰ニ於テ大友幕下ノ諸將二
肥双筑ノ國人等大半大友ニ叛キ或ハ高津ニ屬シ
或ハ龍造寺ニ從フ隆公此弊ニ乘シ隣國ヲ討從ヘ
ラレントテ先廻文ヲ以テ自國他國ノ城持等ヲ催
促セラル此時我公ハ遣サル所ノ状ニ云

頃豊州衆到日向表著陣候之處薩摩衆罷出候而
豊州陣切崩悉敗軍候豊州宗徒之衆無殘届之由
申候彼段非不実候為御存知候就夫近日筑後表
可相働覚悟ニ候陣立覚悟候而可有御待候日限
等從是又々可申入候此度ハ他國働ニ候之衆人
數等御馳走肝要ニ候亦蒲池鎮並我等同意ニ候
其外筑後の國衆ニ三人同意之衆候是又為御存
知候 恐々謹言

霜月廿二日

隆信判

長述參る

我公龍造寺下総守ヲ大物頭トシ南里隼人佐吉岡
玄蕃允福地藏人等ヲ弓銃ノ物頭トシ隆公筑州ノ
軍ニ從ハシム六郎次郎賢康公御願ニ依テ隆公ノ
御手ニ屬セラレ筑後ニ御出馬有今年十六歲御初
陣ナリ我公ハ多久城ヲ守ラレ毎度ノ御陣ニ御出
馬ナシ是隆公ノ命ニ依テナリ抑多久城ハ西肥前
松浦有馬等ノ押ヘニシテ西一方ノ肝要ノ所ナリ
因テ我公是ヲ守ラセラレ武備常ニ怠リ玉フコト
ナシト云々

同七年己卯 長信公御年四十二

隆公去年冬ヨリ筑後ニ御在陣賢康公御供ナリ筑
後ニ於テ豊後衆蜂起ニ因テ隆公使札ヲ差遣ハサ
レ重テ多久ノ軍兵ヲ御相談有八月上旬我公石井
主計允武藏入道中嶋右衛門兵衛河原左馬允横尾
空允以下弓銃ノ士卒數百人ヲ遣ハシ筑後ニ發セ
シム處々ノ合戰多久勢ノ勲功最多シト云
今年我公ノ御息女(名土壽後真光院ト号セラ

今年御年十六) 後藤弥次郎晴明ニ嫁セラル
隆公采地ヲ與ヘ久保田ニ住セシム

久保田五百町芦原八十丁藤津郡ノ内数十町新
ニ封セラル、ノ地ナリ天正十年筑後國荒木村
十町ヲ増封セラル

同八年庚辰 長信公御年四十三

五月隆公軍ヲ出シ筑前國ニ発向セラル我公下総
守康房以下騎卒數百ヲ遣シテ御加勢有隆公御勝
利ヲ得ラレ筑前ヲ治テ御歸陣有七月下旬ナリ

直茂公譜 舍弟龍造寺和泉守長信下総守信綱
ハ多久ヨリ出テ上松浦ヲ經テ會スト

或説ニ七月隆公江上家種後藤家信多久中務ヲ
大将トシ犬塚馬場等其勢五千餘ヲシテ肥後ニ
発行セシム 鎮西志

同九年辛巳 長信公御年四十四

三月隆公龍造寺ノ御城ヲ卅子民部太輔政家公ニ
御讓有テ須古ノ城ニ移ラセラル

隆公五ヶ國御領知ノ節御一門並肥前國中譜代
幕下侍領知二十町以上

- 一 知行 八百七十町 長信公
- 一 同 千五百七十町 式部左衛門家晴
- 一 同 五百三十町 鍋嶋飛驒守信昌
- 一 同 千七百町 江上又四郎家胤
- 一 同 千三百町 後藤善次郎家信

其餘ハ略ス

四月政家公肥後ヲ征セラル我公多久松浦ノ軍ヲ

率ヒ御出馬有龍家ノ諸將進テ赤星ノ城ヲ陥ル其
他城隈部甲斐大津山鹿子木和仁等ノ城々悉ク御
手ニ属ス政家公頓テ御歸陣有

隈部ノ軍中ニテ御家臣徳永八郎左衛門等甲付
ノ首數級ヲ取テ感賞ニ預ル

五月二十六日蒲池鎮並ヲ與賀ニテ御誅戮母公慶
闡夫人甚是ヲ歎カセラレヤ、隆公ヲ疎セラル

六月平戸ノ城主松浦肥前守鎮信使ヲ我公ニ遣シ
テ鄰好ヲ修ム

到須古隆信公御館移之御祝儀千秋萬歳ニ候殊
更於肥後國中悉皆被属御手候右之段為今申候

使者申付候仍而御太刀一腰虎皮一枚追献候表
御祝礼斗候猶中山藤五左衛門尉可相建候条不
能祥候 恐々謹言

六月十三日 鎮信 判

長信 参御宿所

今年我公鍋嶋飛驒守信昌公ノ御息女ヲ御養子ニ
成サレ(名ハ千鶴安順ノ御室ナリ時ニ御年十二)
多久城ニ迎ヘラル

天正十年壬子 長信公御年四十五

春隆公ノ御息女(法名静室)松浦貴志岳ノ城主
波多参河守親ニ御嫁娶有多久御通行ニテ松浦ニ
赴カル

政家公大軍ヲ率テ筑後ノ國ニ御発向高良山ニ御
陣ヲ居ヘラレ黒木戸原等ノ輩ヲ御征伐有又田尻

鑑種カ高尾ノ城ヲ攻メラル肥筑三州ノ軍兵是ニ
從フ我公六郎次郎家久公ト共ニ御出馬有後藤貴

明同家信父子モ又出陣有
十月高尾ノ城ヲ圍ム同十七日戸原ノ城ヲ攻テ是
ヲ陥ル今年有馬義純逆心ノ聞ヘアリ隆公番兵ヲ
遣ハシ深江安徳及ヒ千々岩ノ境ヲ守ラシム

同十一年癸未 長信公御年四十六

政家公筑後御在陣我公家久公ト共ニ是ニ從ハル
嶋津義久舍弟兵庫頭義弘ヲ遣シ龍造寺ト對陣ス
有馬ノ一族安徳氏當家ニ叛ヒテ籠城シ援兵ヲ島

津ニ乞嶋津義弘新納伊集院等ヲ遣シ有馬安徳ヲ
救フ隆公藤津須古武雄多久杵嶋郡等ノ兵ヲシテ
代ル代ル深江ノ境ヲ守ラシム

六月深江表ノ合戦佐嘉ノ軍勝利有テ薩摩ノ軍將
新納刑部太輔(武藏守嫡子)以下數人ヲ討捕ル

十月政家公軍ヲ率ヒテ筑後ヨリ肥後ニ御発向南
ノ関ニ陣セラル家久公多久ノ兵ヲ率テ御出馬有

政家公嶋津ト御對陣日ヲ重ネラル秋月種實カ扱
ヒニテ和平有向家肥後ヲ分ケ各半國ヲ領セラル

政家公ハ筑後ニ御凱陣ナリ

日峯公譜 高瀬川ヨリ巽ノ方ヲ嶋津領卜定メ
新納武藏守忠元御船ニ在テ分内ヲ守ル川ヨリコ

ナタ乾ノ方龍造寺領トシテ上総介家晴ヲ弥南ノ
関ヘ居カレ太田右衛門太夫家豊内田肥後守入道
榮節ヲ大野別府ヘ被差置横岳下野守頼續姉川兵
庫助信秀ヲ横嶋ノ城ヘ被召置各御下知ヲ蒙テ其
界ヲ警衛ス

一説ニ此國分ケハ去天正八年ノ事ナリトモ

(以下 次号に続く)

《儒林》

多久市文化財保護審議会委員

服部政昭

田上綽俊

(天保二年(1831) -)

明治二十六年(1893)



▲湖南田上先生墓
(多久町尾越墓地)

湖南田上先生墓 (墓碑銘原文)

君諱綽俊字子裕號湖南田上氏遠祖狩野法眼食于江州田上郷子孫因氏焉數世至成俊君始仕我多久氏君幼好學年十七入佩川草場先生門居八年學大進歸為郷學指南進為司農官明治元年從軍至白川翌年為酒田縣權大属無幾辭歸為郷學副教授既而學廢而罷七年遊丹波下帷教授尋入京師十三年郷之有志者與丹邱義學推君為教授乃歸於是盡心學事提撕最力廿六年春罹病纏綿弗瘳遂以五月念一日歿享年六十有二君為人温良易直毫無圭角其授徒諄諄不倦與人嚮然可親以故人薰其惠抑我多久以文學著先下者多矣而近歲者宿踵歿後進之士僅得聞道者獨頼有君而今則以矣可勝慨哉考諱英知妣德永氏娶渡邊雄女無子養松本德馨四子致俊為嗣現官長寄縣頃者門人相謀囑余紀其行實付之于貞珉余嘗奉職

文部檢海内學士事蹟頗詳而好學如君者不多見其比余豈得不喜而紀之哉

明治廿七年申午七月古賀靜修撰

読み下し文

(多久古文書村村長 大園隆二郎先生読み下し)

君諱は綽俊、字は子裕、湖南と号す。田上氏遠祖狩野法眼は江州田上郷に食む。子孫因りてこれを氏とす。數世成俊君に至り、始めて我が多久氏に仕う。君幼くして學を好み、年十七、佩川草場先生の門に入る。居ること八年、學大いに進む。歸りて郷學の指南となり、進みて司農官となる。明治元年、從軍して白川に至る。翌年酒田縣權大属となるも幾ばくなくして辭して歸り、郷學の副教授となる。既にして學廢せられて罷む。七年、丹波に遊び、帷を下して教授す。尋いで京師に入る。十三年、郷之有志の者、丹邱義學を興し、君を推して教授と為す。乃ち歸りて是に心を學事に盡し、提撕最も力む。廿六年春、病に罹りて纏綿、瘳えず。遂に五月念一日を以て歿す。享年六十有二。君の人となり、温良易直、毫も圭角なし。其の徒に授くるに諄諄として倦まず。人に與かるに嚮然親しむべし。故を以て人は其の惠に薰ず。抑も我が多久は文學を以て天下に著る者多し。而して近歲、普宿踵いで歿す。後進之士、僅かに道を聞き得る者、獨り頼みて君に有り。而るに今則ち亡べり。勝けて慨すべき哉。考諱は英知、妣は德永氏、渡邊雄の女を娶る。子はなし。松本德馨四子致俊を養いて嗣となす。現に長寄縣に官す。頃者門人相い謀りて、余に囑して其の行實を紀し、之を貞珉に付さんとす。余嘗て文部に奉職し海内學士の事蹟を檢ぶること頗る詳らかなり。而して學

を好むこと君の如き者は、其の比を見ること多からず。余豈に喜びて之を紀さざるを得んや。
明治廿七年申午七月 古賀靜修撰す。

田上家と綽俊

多久に遺っている『多久家諸家系図』、『舊多久邑人物小誌』、『水江事略』、『墓碑銘』をみると、田上氏の遠祖は、狩野法眼の領地であった江州田上郷(滋賀県大津市田上)だったので、その子孫は田上氏を名乗った。多久家に始めて仕えたのは、田上成俊(孫右衛門)の時、水江龍造寺五世(多久家初代領主多久長門守安順)に召されて多久家の士族となった。記録によると『慶長十九年(1614)十月、多久長門守安順公は、五十二騎、歩卒六百余を率いて原の城、火の江城を守られる』とあり、その騎士の中に田上孫右衛門の名が記されているので慶長年間には多久家の家臣となっていたと推定できる。系図は文化九年(1812)、第七代田上左五兵衛武建による差出系図であるのでそれ以後については不明である。
それから数代たつて、天保二年(1831)に綽俊は生まれている。諱は綽俊、字は子裕、通称は馬之助、湖南または山雪道人と号した。号の湖南は、先祖の出身地が琵琶湖の南であった事から名付けたものと思われる。多久城下に生まれ、郷校東原庵舎を卒業後、十七歳で草場佩川の門に入り八年間の問學び、學問(儒學)は大いに進み、東原庵舎の指南役となり、司農官となった。明治元年(1868)戊辰戦争に太田原出張兵隊二分隊に属し從軍し、東京へ凱旋する。翌、明治二年、酒田縣(山形県)の権大属に任じられるが、間もなく辭して郷里へ帰り、東原庵舎の副教授となつ

たが、明治新政府の教育制度改革で郷校は廢されてしまったので、明治七年（1874）、丹波国馬路村に塾を開く。移居して京都聖護院に家塾を開き、その後浄土真宗大谷派能登教務所で漢学を教える。明治十三年（1880）に郷土多久の有志が「丹邱義學」を興し、推されて教授となり、その傍ら私塾「耶須舎」を開き子弟教育に専念するが、明治二十六年（1893）、病に罹られ、なかなか回復されず、とうとう五月二十一日に亡くなられた。享年六十二歳。多久村尾越の墓地に葬られる。

先生の人となりは温かく穏やかで、やさしく素直な方で、いささかも尖ったところがなかった。教え子に教えられる様は、懇切丁寧で倦むことがなく、人に接するときは和やかで親しむことができた。このため人は先生のその特性に感化されたのである。

そもそも我が多久は儒学をもって天下に名をあらわされた方々が多かった。しかし近年は、学識の豊かな老人が次々と亡くなり、その後輩たちが先人の道（儒学）を学ぶことができる方は、ひとり先生を頼むのみであったが、その先生も今は亡くなられてしまった。これを嘆かないでいられようか。

父の諱は英知、母は徳永氏。妻は渡邊雄の娘を娶ったが、子供はいなかった。松本徳馨の四子致俊を養い、後継ぎとした。今は長崎県の官吏である。このごろ門人たちが私に依頼して、先生の行つてこられた業績を墓石に記すことを計画した。私はかつて文部省に奉職して、国内の学識ある者の事跡をとて詳しく調べてきた。しかし、これらの人々に比較しても先生のように好学の方は多くなかった。私は喜んでそのことを記したいと思つ

ているのだ。

明治二十七年申午七月、古賀静修が記す。

墓碑銘原文者の古賀静修は、弘化三年（1846）多久西の原に生まれ、郷校東原座舎に学び、その後、草場佩川の家塾に学び、明治九年から明治二十六年まで『大日本教育史』の編纂員として文部省に奉職、明治二十九年（1896）歿している。その古賀静修が郷土の先賢であり、教育者としての田上綽俊の業績を高く評価して記している。

立命館大学創始者 中川小十郎との出会い



▲幼少の中川小十郎と恩師田上綽俊
(立命館史資料センター所蔵)

平成二十九年二月

七日、立命館大学史資料センター調査研究員である長谷川澄夫先生が、中川の恩師田上綽俊の調査に多久を訪れられた。

少年時代の中川小十郎に学問の基礎を授けたのは田上綽俊であった。中川は丹波馬路村から京都、能登へと田上綽俊に随従して学んだ。二人の関わりについては『立命館創立者生誕150年記念 中川小十郎 研究論文・図録集』、『立命館史資料センター紀要（創刊号）』をみて貰いたい。

同センターには、田上綽俊から中川小十郎や養父中川武平太宛の書簡が一〇〇点余り保管所蔵されている。それらを読み解けば田上綽俊研究の有効な資料となるだろう。また、『七尾の地方史』23号には、「中川小十郎と七尾の女性」と題した、横川敬雄氏の一文が掲載されている。その中に「明治十年ごろ七尾の教務所へ経書や詩文を教えるため

に、佐賀生まれの田上綽という先生がきていた。（中略）田上先生に学僕といえる十二、三歳の少年二人が同行していた。（中略）昭和十年代の終わりころ、小十郎翁の晩年、横川巴人（横川敬雄氏の父）が京都の中川邸を訪れると、文箱に入れた師の田上先生の文稿を持って一本杉の横川宅へたびたび使に行つたものだと、翁は古い七尾時代の思い出を話してくれた。「田上先生」と敬語をつけて話したのが、印象的であった。（中略）中川小十郎翁にとっても田上綽俊は生涯の恩師だったのである。

四十数年前に一度、尾越の墓地を訪ねた。マムシに出会して、それ以来である。厳冬期であれば大丈夫だろうと思ひ、写真と拓本をとりに行つてみたが、墓地は荒れて雑木林となつてしまつている。田上綽俊が亡くなつて百二十余年。住まいの跡も、田上が教授した丹邱義學の跡も知つている人はいなくなつた。また一人、歴史に埋もれてしまおうとしている。

最後に、墓碑銘を読み下してください。大園隆二郎先生。貴重な写真の掲載許可および資料をお送りいただいた学校法人立命館史資料センター、七尾市立図書館の皆さまに心より御礼を申し上げます。

【参考文献】

- 『水江事略』多久市郷土資料館蔵
- 『多久諸家系図巻之七 田上氏』多久市郷土資料館蔵
- 『舊多久邑人物小誌』舊多久邑史談會、一九三二年
- 『多久市史』人物編、（多久市、二〇〇八年）
- 『七尾の地方史』第23号（七尾地方史の会、一九八九年）
- 『立命館創立者生誕150年記念 中川小十郎 研究論文・図録集』（学校法人立命館 立命館史資料センター、二〇一七年）
- 『立命館 史資料センター紀要（創刊号）』
- （学校法人立命館 立命館史資料センター、二〇一八年）

ふるさとの石碑 3 安藤寛先生文学碑

公益財団法人孔子の里 理事 服部政昭

旧邑主

多久氏の明倫

人は学と

ただより

聖廟を

建て給りたり

寛



安藤寛(あんどひろし)

(1892~1993)

明治二十五年十月二十四日。佐賀県小城市東多久村別府に生まれる。旧制長崎高等商業学校を卒後、東京深川で八百名を抱える安藤寛商會を設立するが、終戦後、會社を閉鎖して短歌に専念する。大正八年「竹柏會」入門。佐佐木信綱氏に師事。「竹柏會」の柱石として四十余年を會と信綱氏のために尽くされた。平成五年一月九日没。享年百歳。

歌集に『山郷』、『千林』、『二水』、『二水以後』。歌碑は鎌倉の浄智寺にもある。

夫人は、小城藩土川副二水の曾孫。二水は興讓館に学び、弘道館で井内南涯に学ぶ。藩命により昌平校に入り古賀侗菴に從つた漢學者。



昭和61年9月11日、藤沢市鶴沼の自宅で 寛 94歳、妻 84歳

平成四年九月十一日、多久聖廟の参道脇に歌碑が建立された。除幕式には、安藤寛先生はご高齢のため出席されなかったが、百崎素弘(財団法人孔子の里理事長・多久市長)、野方辰美(同法人常務理事・多久市文化連盟会長)、永石英彦(同法人事務局局長)、最所和泉(多久市役所企画課長)、不二見達朗(市民グループたんきゅう會代表)、園田節子(白鷺短歌會主宰)、森誠治(心の花短歌會同人)、代居三郎(ひのくに短歌會主宰)、尾形節子(麦の芽短歌會同人)、それぞれの會の同人たちが多数集つた。式典終了後には、旧多久村立公會堂(西溪公園寒鴛亭)で、たんきゅう會主催の『観月の集い』で仲秋の名月を愛でられた。

・歌集『二水』、『二水以後』より故郷多久に関する歌を抜粋

郷里

遠空に連なる山の容みな記憶の中に郷里近し
 見え来たる山影親し遠空に曇れる峯は天山ならむ
 郷里の山の容を涙して身に仰ぐなり帰り来たりぬ
 目にふるるものすべてが沁むごとき故里に帰り知らぬ人多し
 裾上げて腰まで浸り渡りたる少年の日を川辺に偲ぶ
 少年の日の思い出の甦る山辺の小道わけてなつかし
 郷里の春田の青き谷の色美しければ丘をくだらず
 夕焼の美しき空幼年の日を思ひ出でて郷里を行く
 老齢の思ひをそそぎ踏む石に躓くさえも道のなつかし
 故郷の何にすがりて懐ひ出を追ふわれならむ帰り来りぬ
 郷里に老のすべてを傾けて帰り来たりぬ山里したし
 朝さめてきびしき寒さ天山に雪降りたりといふ声きこゆ

生誕の家

この室に呱声を揚げし稚児と身を顧みる九十余年
 生誕のこの古家の土間柱身を押し当てて心情に絶る
 屋敷中を流れるし川その頃は清き水なりき音を立てつつ
 燻りし欄間の板目彫刻の虎思ひ出だして涙に仰ぐ
 祖母にいましめられて入れられし蔵の大扉の前にうなづく
 少年のころ蔵に入れられて泣きし日戸明りは北より入りし
 遂の日は此処に納まる家の墓所露けき草を雀りて汗す

多久聖廟

格子扉に顔押し当てて窺えば龍の絵高く内陣暗し
 少年の日は聖廟を恐るゐてみ堂を三度廻るなかりき

別府八幡宮

産土の宮庭ひろく拾ふ砂老いの一生に代えて懐かし
 眼裏にのこる産土の子守り堂樟の巨樹に良くのぼりたり



のんびり古文書散歩

多久市郷土資料館学芸員 山口佐和子

古文書と聞くと、まず皆さんが思い浮かべるのは、どんなものでしょうか。古い和紙に墨と筆で書かれた、なんだかグニャグニャとした文字ですか、それとも博物館で見た立派な文書でしょうか。

確かに古文書には、昔の人はみんなこれを読めたの？と思うような癖の強い文字で書かれた文書もあります。このため、古文書は難しい、読めないよ、と思われる方も多いと思います。でも、昔の人も、突然癖の強いくずし字が読めるようになった訳ではないのです。最初は文字を勉強し、だんだんとくずしがきれいで簡単な文書から読み始めました。子どもたちも寺子屋で、最初にいろは、漢字、数字を勉強し、「往来物」(おうらいもの)と呼ばれる教科書を読みました。「往来物」は、往信来信という名前のとおり、主に往復の手紙の形式で書かれており、季節の事柄、武士や庶民の暮らし、道徳などが文章の中に組み込まれ、文字を学ぶと同時にそれらも学ぶことができるようになっていました。江戸時代の子どもたちはそうした教科書を読みながら勉強をしていたんですね。往来物の中でも特によく使われたのが、「庭訓往来」(ていきんおうらい)でした。「庭訓往来」は、室町時代前期に成立し、著者は僧玄恵といわれていますが、はつきりしません。十二ヶ月に閏八月をいれた十三回の手紙のやり取りの形式で武士や庶民の生活と基本的な単語が記されています。江戸時代

になると、「庭訓往来」を基にした、様々なバリエーションの本が作られました。

江戸時代は出版・印刷の技術が発達した時代です。様々な出版物が発行されましたが、庶民も本を買って読むようになると、誰もが読みやすいように、様々な工夫が凝らされました。「往来物」のような教科書も例外ではありませんでした。まず、漢字にふり仮名が振られました。すべての漢字にふり仮名をふった読み物も多く作られました。現在と違い、木版印刷ですから、細かな文字を一つ一つ彫るためには、大変な労力と職人の技が必要でした。そして、人気の絵師達が元絵を描いた、挿絵がたくさん入った本も作られました。文政十一年(一八二八)に出版された「絵本庭訓往来」では、葛飾北斎が挿絵を担当しました。

「絵本庭訓往来」



<https://www.nier.go.jp/library/rarebooks/orainono/K081-3/> (国立教育政策研究所教育図書館貴重資料デジタルアーカイブより)

少し一緒に読んでみましょう。「茶桶(ちゃお

け)、茶巾(ちゃきん)、茶杓(ちゃしゃく)……」どうやら、お茶に関する言葉が書かれているようです。漢字とふり仮名、どちらも読める部分があるのではないでしょうか。そして、お茶に関する言葉ということがわかれば、この字はもしかして？と予測がつく部分もあるでしょう。全部完璧に読めないため！とは思わずに、少しずつ、わかった！という発見を増やしていくと、古文書が面白くなります。

多久市郷土資料館にも写本の「庭訓往来」が二冊所蔵されています。この資料はふり仮名や挿絵のない文章だけの形式です。郷土資料館では資料の保存状態に問題がなければ誰でも閲覧することが可能ですので、いつかチャレンジしてみるのはいかがでしょうか。

古文書講座の案内

令和4年度も引き続き、舌間先生と山口先生を講師に迎え鶴山塾古文書講座を開講します。初心者の方でも、気軽に古文書が学べます。参加されませんか。

- 舌間輝吉先生 (多久古文書の村 村民)
月日：6/4、7/2、8/6、9/3、10/1、11/12、12/3、1/7、2/4、3/4
時間：10時～12時
会場：東原座舎 (講堂)
- 山口佐和子先生 (多久市郷土資料館 学芸員)
月日：6/18、7/16、8/20、9/24、10/15、11/19、12/17、1/21、2/18、3/18
時間：10時～12時
会場：東原座舎 (講堂)

孔徳懋女史を偲ぶ会

令和4年1月20日、孔子77代直系子孫の孔徳懋女史を偲ぶ会を多久市日中友好協会と公益財団法人孔子の里の共催で開催しました。これまで交流を重ねてきた関係者約20名が参列し、昨年11月に中国・北京市で逝去された孔徳懋さん(享年105歳)の遺徳を偲びました。

多久市日中友好協会の中国との交流活動は昭和58年に始まり、この活動をきっかけとして、多久市と中国山東省曲阜市は平成5年に友好都市を締結。これまで、多久市日中友好協会会員をはじめ多くの市民が中国を訪問し、北京に住む孔徳懋さんとも交流を重ねてきました。孔徳懋さんも3回多久市を訪問され、市民との交流を深められました。

偲ぶ会では、参列者を代表して横尾俊彦多久市長があいさつ。尾形節子多久市日中友好協会前理事長は、「何回もお会いするうちに心が通じ合い、姉のように慕っていました。気品があり、寛大で優しさにあふれた人でした。」

と、長年にわたる交流の思い出を語られました。



来訪・来信・雑録

10月2日 令和3年度多久聖廟周辺合同美化活動

鶴山塾「中国古典の扉⑤」

(講師：武田耕一(公財) 孔子の里理事)

10月6日 ゆい工房「岸川まんじゅう屋さん」

10月11日 令和3年秋季積業学校関係者事前練習

10月15日 令和3年秋季積業総練習

10月24日 令和3年秋季積業

11月2日 第5回多久百景写真コンテスト表彰式

11月6日 (株)JA食糧さが合格祈願「緑起米」奉納式

ゆい工房「こんにやく屋さん」

11月11日 鶴山塾「古文書を学ぶ(初級)①」

(講師：舌間輝吉 多久古文書の村村民)

11月12日 鶴山塾「中国古典の扉⑥」

(講師：武田耕一(公財) 孔子の里理事)

11月20日 ゆい工房「折り紙で素敵な笑顔を」干支カレンダーづくり

11月27日 佐賀県公益認定等審議会立入検査

11月27日 鶴山塾「古文書を学ぶ(中級)①」

(講師：山口佐和子 多久市郷土資料館学芸員)

12月4日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

『新発見！桐野山妙覚寺の仏涅槃図』

(講師：福井尚寿 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館 シニア・アドバイザー・フェロー)

12月4日 全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式、記念講演会

12月8日 鶴山塾「古文書を学ぶ(初級)②」

(講師：舌間輝吉 多久古文書の村村民)

12月8日 鶴山塾「中国古典の扉⑦」

(講師：武田耕一(公財) 孔子の里理事)

12月15日 ゆい工房「本格蕎麦打ち」(後期)

12月18日 多久聖廟イルミネーション点灯式

鶴山塾「古文書を学ぶ(中級)②」

(講師：山口佐和子 多久市郷土資料館学芸員)

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

『幕末佐賀の石炭事情』

(講師：近藤善一郎 佐野常民と三重津海軍跡の歴史館学芸員)

12月28日 執務納め式

12月31日 多久聖廟お火つき

1月4日 多久市新年の集い(天山多久温泉T.A.Q.U.A)

1月8日 鶴山塾「中国古典の扉⑧」

(講師：武田耕一(公財) 孔子の里理事)

1月14日 第1回絵馬奉納式(多久市観光協会)

1月15日 鶴山塾「古文書を学ぶ(初級)③」

(講師：舌間輝吉 多久古文書の村村民)

1月20日 孔徳懋女史を偲ぶ会

2月23日 第2回絵馬奉納式(多久市観光協会)

3月1日 令和3年度第4回理事會

3月4日 東原岸舎火災訓練

3月6日 第3回絵馬奉納式(多久市観光協会)

3月18日 令和4年春季積業委員会

3月19日 鶴山塾「古文書を学ぶ(中級)③」

(講師：山口佐和子 多久市郷土資料館学芸員)

鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」

『奇才の子・草場船山』(講師：芳野貴典 佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸員)

3月23日 令和3年度第2回臨時評議員會

3月26日 鶴山塾「古文書を学ぶ(初級)④」

(講師：舌間輝吉 多久古文書の村村民)

編集後記

新型コロナウイルスの感染拡大もあつてか、例年に増して寒さ厳しい日が多かったように感じた冬もいつの間にか過ぎ、東原岸舎の庭に馬酔木(アセビ)の花が咲きこぼれている。草木たちは寒かった冬も春に備えて準備をしていたのだろう。何時もながらに時節に応じた自然の行動力に感心させられる。

今年も、多久聖廟に多くの絵馬が掲げられた。様々な努力を積み重ね、孔子様に願いを託された人々の想いが、この春につながっていることを念う。

(ほ)

第5回

多久百景写真 コンテスト

多久の素晴らしい景色を広く、たくさんの人々に知っていただくために開催している「多久百景写真コンテスト」。今回で第5回と回数を重ね、本コンテストの存在が福岡や長崎など県外の写真愛好家にも広く知れ渡り、質の高い作品を多く応募いただきました。多久の豊かな自然や文化、さまざまな人の営みを捉えた作品が目を引き、審査員は「難しい審査となった」と評されていました。

多くの写真愛好家のご協力により、この5年間で、多久の四季や伝統文化、歴史を感じる素敵な写真100点を集めた『多久百景』をまとめることができました。

準グランプリ

「梅雨の頃」

藤松 政晴
(白石町)

水彩画と見間違えてしまう作品。梅雨空に煙る木々と山々、手前には田植えをする農家の人たちと早苗が広がる水田。まさに、ふるさと多久の原風景である。



特別賞

「もれたかな(たくまんじゅう)」

井上 郁子
(多久市)

多久を代表する特産品、多久まんじゅうの製造風景。黒っぽい構図だが、白い湯気がもうもうと上がり、窓から注ぐ光が明るい雰囲気につながっている。



グランプリ

「初夏のびわ畑」

伊藤 方子
(多久市)

深い緑色の葉の中に、だいたい色の実がたわわに実っている。背景には刈り取りが終わった麦畑が広がり、のどかな作業風景がふるさとの食の豊かさを感じさせる。



特別賞

「沿線の夏景色」

絹川 政憲
(福岡県小郡市)

左手前に咲くキョウチクトウの赤と白、船山の北側に沸く入道雲が夏を感じさせる。ディーゼル車が一時止まっているかのように見え、夏の思い出の一コマとなっている。



特別賞

「6月の風景」

山田 力
(多久市)

水田に反射している夕焼けを入れることで自然の雄大さが表現できた。上下のバランスも良く、夫婦らしき人と田植え機のポジションもこころやかなという好位置。

